# 霞ヶ浦・如来寺の由来　水底の阿弥陀像

（茨城県石岡市柿岡　如来寺所蔵）

関東絵伝（場面）　霞ヶ浦、如来寺の由来、お田植歌・筑波神の老女子

## (1)「帰命山無量寿院如來寺略縁起」より

宗祖親鸞聖人は建保元年（四十一歳）の秋の頃に常陸の国（現在の茨城県）に入りました。その時以来、霞ヶ浦の湖中に怪しく光るものが現れました。その湖中の怪しい光のために魚が取れなくなり、漁師たちは生活に困り嘆き悲しみました。

建保二年三月十四日の夕方、白髪の老人が湖中に浮かんだ木の上に乗り、現れました。木原の里の浮島という場所に上がり、漁民に告げました。

「私は鹿島明神です。明日親鸞聖人と申す稀代の名僧がこの所を通られます。あなたたちが以前から恐れている湖中の光り物を御覧に入れ、救ってもらうようお願いしなさい。決して疑ってはいけません。

また、私が乗ってきた浮木は天竺から渡来した名木です。聖人に献上して下さい。」

と、そのまま姿は消えました。

村人は、喜びまた驚きました。まさしく私たちを憐れんで下さったことであるとして、村人一同相い寄り集まって聖人のいらっしゃるのをお待ちしていたところ、次の日、三月十五日の昼ごろ、親鸞聖人はお告げのように湖畔を通られました。村人たちは見るより早く聖人の前に集まり、お願いしました。聖人は快くお引き受けになりました。

その夜、聖人は湖中の光を見て言いました。

「これは、怪しい光ではありません。仏像が放っている光です。早く船を出して引き上げましょう。」

と、漁師一人と共に聖人自ら船に乗り、その光り物に網を打ち、念仏と共に引き上げました。そうすると、光り輝く一体の阿弥陀如来の御尊像が引き上げられました。

聖人は喜びのあまり、草庵を建て、この阿弥陀如来を安置しました。さらに香木で聖徳太子の像を作り安置し、村民たちに教えを広めました。

この草庵を『霞ヶ浦の御草庵』といい、聖人が長年御出入りされた道場です。

その後、上野の国（現在の群馬県）片岡郡の城主、片岡尾張守源九郎親綱という剛勇無双な武士がいました。兄である信親が官の命令により鹿島神宮の大宮司に任命されたため、弟である親綱が家を継ぎましたが、出家したい気持ちが強くその機会を考えていました。ある時、本尊の霊夢を感じ、建保三年の春にようやく親鸞聖人の草庵を訪れ、一首の和歌を献じました。



暮らしにじいーん　真宗大谷派東京教区
© 真宗大谷派東京教区　当ホームページに掲載されているあらゆる内容の無断転載・転用を禁止します。

霞ヶ浦・如来寺の由来　（霞ヶ浦草庵碑）

霞ヶ浦・如来寺の由来　（聖徳太子像）

霞ヶ浦・如来寺の由来　（水底の阿弥陀像台座）

よしあしも知らぬ難波の蚤小舟
誓いの海によりて定めん

聖人の御返歌に

本願の海によりてのあま小舟
櫓櫂（ろしゅう）もとらて乗りてしかなり

片岡親綱は聖人の教えを聞いて、直ちに出家して弟子になりました。聖人の和歌の下の句そのままに乗然房領海と法名を授けられ、二十四輩第四の直弟子に選ばれています。

親鸞聖人が常陸国を出発する時に、乗然房もお供を願い出ましたが、

「後に残る同行を頼むぞよ。」

と言って、聖徳太子の像に、御形見の御真影を添えて、後を託しました。

その後、応仁の乱の余波が年を経ると共に激しくなり、世の中が騒然としていました。

十代目了然の代に今の柿岡の里に移転しました。ここは稲田の御草庵から南へ10キロの位置であり、かつて親鸞聖人が常に往復、宿泊していました里であり、門徒の懇望により移転しました。それは明応七年八月のことでした。

なお、聖徳太子の像を「浮足の太子」と申します。これは、親鸞聖人が御発足の折に、別れを惜しんで草庵の門前まで空を飛んで御見送りをしたことから名付けられました。

## (2)「如来寺縁起」より

1. 栴檀香木浮足の太子

鹿島明神から寄進された栴檀という香木を親鸞聖人御自刻された聖徳太子像。聖人京都に戻るとき形見として残されたが、別れを惜しんで門前まで空を飛んで見送ったことから浮足の太子と称する。

2. 湖中御感得本尊の台座

親鸞聖人が湖中から引き上げた阿弥陀仏の台座。阿弥陀仏は聖人が京に戻る際、携行し台座のみ安置。なお、この阿弥陀仏は現在真宗木辺派の本山、錦織寺の本尊と伝えられている。

3. 霞ケ浦御草庵

南庄志太郡木原の里浮島に結んだ草庵。湖中御感得本尊並びに浮足の太子を安置し、聖人十余年出入りされた道場。明応七年如來寺十代目了然の時現在の柿岡に移転。現在に至る。



暮らしにじいーん　真宗大谷派東京教区
© 真宗大谷派東京教区　当ホームページに掲載されているあらゆる内容の無断転載・転用を禁止します。